学生大使　実施報告書

氏名：塩谷芽生
学部・学科（コース）・学年：人文社会科学部・グローバルスタディーズコース・２年
派遣先大学：新モンゴル学園
派遣期間：２週間

１　日本語教室での活動内容

日本語教室での活動内容として、自分が行った授業と日本語祭りというイベントの２つの活動を挙げる。まず授業についてだが、自分は山形の食文化を紹介する授業を行った。山形で有名な食べ物としてさくらんぼ、納豆汁、芋煮について紹介した。それぞれの食べ物が山形県民にとってどのような存在なのかを、モンゴルの食べ物と比較して紹介するなどした。より分かりやすい授業を展開するために、実際に動画を見せる、クイズを取り入れる、漢字の上には必ずひらがなを表示するなどの工夫をした。また、芋煮フェスティバルで使う鍋のサイズを説明する際には、私自身の写真を使用し、その鍋の大きさを、ユーモアを含めて説明するなどした。誰かを相手に授業をするのは初めての経験だったが、授業の構成を考えたり、スライドを作ったりする準備を含め、一通りを楽しんで行うことが出来た。この経験を通して、先生として子供たちに授業をすることの責任の重さや、先生方の偉大さを知ることができた。

日本語祭りというイベントでは、日本の文化をテーマにしたいくつかのブースを運営され、生徒が自由に楽しむことができるというシステムになっていた。その中で私はおにぎりを提供するブースを担当したが、おにぎりの具材やふりかけなど、学生たちが自分たちのやり方で考えながら準備をしていて感心した。おにぎりブースの他にも、書道、早口言葉、着物体験などのブースがあり、どれも高いクオリティで驚いた。また、イベントの最終日には１年生による日本語劇の発表があった。その際に各クラスの劇の審査員を担当したが、どのクラスも道具や劇の内容を工夫しており、がんばって準備をしてきたことがよく伝わってきた。また、難しい日本語の台詞も一所懸命に言っていてとても良かった。

２　日本語教室以外での交流活動

日本語教室以外での交流活動として、学外での現地学生との交流と、ホストファミリーとの交流の二つを挙げる。現地学生との交流では、ホストファミリーの友達と仲良くなり、休日や放課後に彼らと出かけたり、遊んだりした。特に趣味の合う学生には、あちらの家に招待してもらい、現地学生流の遊び方をたくさん教えてもらった。それらの交流を通して、モンゴルの学生はみな積極的でとてもフレンドリーであることをとても実感した。

ホストファミリーとの交流では、毎日朝と夜に美味しいご飯を必ず提供してくれた。時には自分の口に合わないと感じることもあったが、家族みんなで空間をともにして食べること、また自分のために料理を作ってくれているという事実がとても嬉しく、毎回完食した。私の

ホームステイ先の家族は、三女一男と父母の大家族で、毎日とても賑やかだった。平日は、学校から帰ると次女と三女がいつもすぐに玄関先に来てくれて、元気いっぱいに迎えてくれたため、授業での一日の疲れが吹き飛んだ。夕飯の後は、いっしょに折り紙をしたり、取っ組み合いをしたりして遊んだ。また、父母もユーモアがありとても親切だった。休日はいつも一緒に外出をしてくれた。雪山やレストランの入っているゲル、博物館、デパートなど、実に多くの場所に連れて行っていただいた。また、モンゴルでは３月８日は国際女性デーで休日であり、女性に花をプレゼントするという習慣があった。そのため、自分も母にお花をプレゼントし、自分は父からお花をプレゼントしていただいた。モンゴルでの滞在がはじまってからすぐに本当の家族のように私を迎え入れてくれたホストファミリーには、とても感謝している。

３　参加目標への達成度と努力した内容

参加目標は、海外での生活を通して、日本とは異なる文化や価値観を実際に体験し、自分自身の教養を深めること。また、現地の学生に日本についてより詳しくなってもらい、日本をより好きになってもらうことであった。

自分の教養を深めるという目標に関しては、大いに達成することが出来たと思う。2 週間の滞在の中で、モンゴルの経済状況や人々の生活の様子、考え方などをたくさん知ることが出来た。努力した内容としては、様々な人と仲良くなるため、自分から積極的に話しかけたり、遊びに誘うなどした。その結果、より深くモンゴルの人たちの価値観や文化を知ることができたと思っており、自分でも満足している。

現地の学生に、日本をより好きになってもらうという目標に関しては、こちらも大いに達成することが出来たと思う。学校内で努力した点は、日本、特に山形の有名な食べ物を紹介する授業を行い、多くの学生に日本の食べ物について知ってもらおうとした点である。また、授業サポートという形で日本語の授業に参加した際には、日本語を勉強途中の生徒たちとたくさん会話をし、彼らにネイティブの日本語をたくさん聞いてもらおうと努力した。ホームステイ先で努力した点は、夕食に日本料理を作り、家族に食べてもらったことである。私は滞在中にお好み焼きとうどんを振舞ったのだが、どちらもモンゴルではあまりメジャーな食べ物ではなかったため、この機会に日本の料理を知ってもらうことができてとても良かった。また、それらを食べたときの家族の反応もみなそれぞれで、口に合わない人もいるという事ができてとても興味深かった。

４　プログラムに参加した感想

プログラムに参加した感想としては、日本とは違う国で生活をしてみたい、その文化や価値観などを知りたいというかねてからの願いを叶えることができてとても満足している。日本とは環境も言語も全く異なるモンゴルで２週間生活をすることで、気づくことがたくさんあった。日本は電車や新幹線などの交通機関が発達しており、町も比較的きれいで整備されている。また、紙幣だけでなく硬貨も使われている。しかし、日本人の性質として、人見知りな人が多いことや、授業の中で分かっていることがあったとしても周りの目を気にしてあま

り発言をしないことが多い。一方モンゴルでは、寒さなどの様々な影響で、バス、タクシー以外の交通機関が存在しておらず未発達である。また、寒さをしのぐための暖房設備の影響で町の空気が汚染されており、慢性的に咳をしているウランバートル市民が多いと感じた。お金も紙幣しか存在しておらず、一枚のお金の価値が日本より低いと感じた。しかし、モンゴルでは親切な人が多く、また積極性がとてもあり、記憶力も良いと感じた。また、英語を話すことができる人も多く、今後５年ほどで大きく発展する国なのではないかと感じた。教科書などでしか学んだことがなかった他国の発達状況を、身をもって知ることができたことも、本プログラムに参加して良かったと感じる点の一つである。

５　今回の経験を踏まえた今後の展望

今回の経験を踏まえた今後の展望として、二つの点を挙げる。一つは、自分の英語の能力をさらに向上させることである。モンゴルでは幼少期から英語を勉強している人が多く、英語が達者な人が多かった。その事実に刺激を受けたため、これから自分もさらに英語を勉強しようと思った。

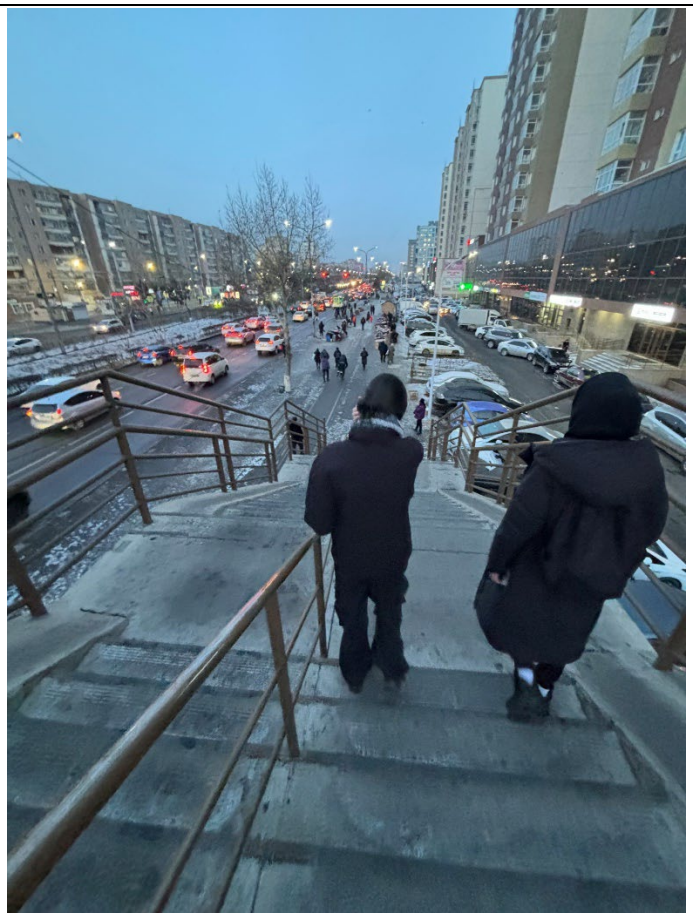
二つ目は、モンゴルだけでなく他の国にも訪れるということである。本プログラムに参加したことで、生まれて初めて日本を出て、様々な経験をすることが出来た。世界にはたくさんの国があり、その国の文化や価値観が存在する。それらを自分の目で確かめたいと強く思うため、今後もいくつかの国を訪れたい。

6　現地での活動写真

チンギスハンの像とホストファミリー

ホストファミリーに振舞ったお好み焼き

【学生大使 実施報告書】

仲良くなった学生達とウランバートルの様子

ゲルの中にあるレストランで食べたモンゴルの伝統料理